

# 複式学級における国語学習で「読解力」を高める

## 学習指導法に関する研究

～書くことを取り入れて～

大豊町立大豊小学校 教諭 西村三知

現在国語教育では「読解力」を総合的に高めることが求められており、複式学級が多い高知県でも同様である。学習場面での課題が多い複式学級だが、複式学級における学習指導の良さを生かした研究が重要である。「読解力」を高めるために「書くこと」を効果的に間接指導の場に取り入れ、児童が①思考を途切れさせることなく学習できる②主体的に自分の考えを書ける③書いたことをもとに交流し合い読みを深めることのできる学習指導を研究し検証授業を行った。その結果、書く内容や書き方など具体的に指示すると学習内容が深まり学習の流れがスムーズになる。書いたことが次につながり、役立ったと思える課題には積極的に取り組むことが明らかになった。 キーワード：読解力、書くこと、ノート指導、間接指導、学習課題

### 1 はじめに

平成 15 年に実施された PISA 調査で、わが国の子どもたちは「読解力」に関する問題、特に書かれた情報から推論して意味を理解する「テキスト解釈」や、書かれた情報を自らの知識や経験に位置づける「熟考・評価」、そしてテキストに基づいて意見を論ずる自由記述式の問題を苦手としていることが明らかになった。また、平成 13 年度小中学校教育課程実施状況調査においても「相手や目的などに応じ、自分の考えを明確にして書く力が十分身に付いていない。」と指摘されている。これら 2 つの調査から、自分の考えを明確にし、相手や目的、意図を踏まえて内容を新たに構成しながら文章を書くことが不十分であるという課題が明らかになった。平成 15 年度小中学校教育課程実施状況調査でも同じような課題が出された。一方、現行の学習指導要領では子どもたちに「生きる力」を育むことが求められており、知識や技能に加え、学ぶ意欲や主体的に問題を解決しようとする「確かな学力」を身に付けさせたいことが示されている。このような現状から、学習指導要領のねらいとするところを一層徹底することが重要であり、特に国語教育においては「読解力」を総合的に高めていくことが求められている。

【表 1 高知県の現状(複式学級併設校)】

高知県は全国的にも複式学級の多い県であり、県内の公立小学校の約 38.1 パーセントに複式学級が併設されている。(表 1) 複式学級においても同様に「生きる力」や「確かな学力」、「読解力」を身に付けさせることが求められている。しかし、学級の複雑化や複式学級における学習指導の難しさ等多くの課題があるにも関わらず、複式学級における学習指導法の先行研究はあまり多くない状況である。従って複式学級で「読解力」を高める学習指導法を考察することは意義あることと考えられる。

平成19年度公立小学校における複式学級併設校			
所管	地域	学校数	学級数
東部教育事務所	安芸	11	21
	香美	2	5
中部教育事務所	土・長・南国	10	19
	吾川	9	13
	高岡	24	43
西部教育事務所		37	63
高知市		4	9
合計		97	173

### 2 研究目的

「読解力」の向上には、内容を正確に読み取ることが前提であり、児童がどのように読み取り、解釈し評価したかという思考過程を明確にする必要がある。

そこで、複式学級における国語科学習指導で、児童の「読解力」を高めるために、間接指導時に「書くこと」を取り入れ、その効果性について検証することにした。児童の課題解決へ向けての学習活動、間接指導と直接指導とのつながりをスムーズにするために、目的意識がもてる書く活動を取り入れる。

その際、何をどのように書くのかを明確にすることによって読む方法、書く方法を身に付けさせるなど、「読解力」向上につながる「書くこと」を取り入れた具体的な学習活動や指導方法について研究し検証する。

### 3 研究内容

#### (1) 求められている「読解力」とは

##### ア PISA 調査における「読解力」

PISA 調査における「読解力」の定義は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ効果的に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。」である。このことは、学習指導要領がねらいとしている「生きる力」、「確かな学力」と同じ方向性にあることから、文部科学省からは次のような読解力向上プログラムの重点目標が出され、これに沿った授業改善が求められている。

- ・テキストを理解、評価しながら読む力を高める取組の充実
- ・テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実
- ・様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実

##### イ 国語科における「読解力」

国立教育政策研究所では、国語科における「読解力」を次のように定義している。狭義の読解力とは①意味を理解する②書かれていることが分かる③その主題はどんなことで、どのような意図で書かれたかを解釈する力である。広義の読解力は、この力に加えて、読んで自分の考えたことを表現する力までを「読解力」として示している。

また、白石氏(2005)は『読解力』とは『読む方法・書く方法』という方法の技術(言語技能)の習得を目指し、さらにその方法を他へ生かすことのできる力『他へ転移できる力』であると捉え、文章を理解・解釈することで人の考え方、認識にふれ自分の考えをもち表現するためには文章をいかに正確に読み取るかが重要である。」としている。このように「読解力」とは読んで理解するだけでなく、自分の考えを表現することまでと捉えられている。

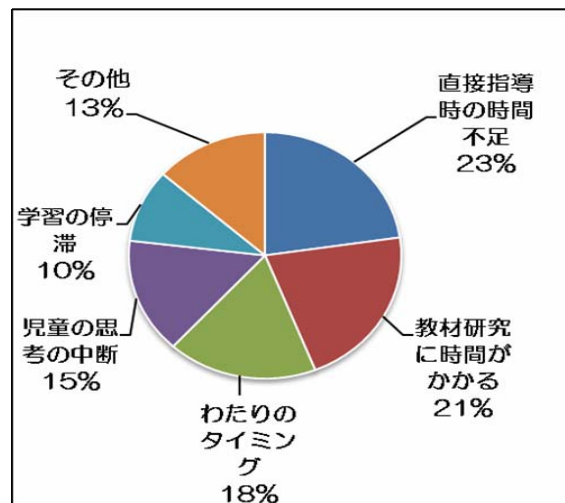
#### (2) 複式学級における学習指導

##### ア 実態調査

本研究では県内複式学級併設校 97 校、複式学級担任 169 名にアンケート調査を実施した。この調査の結果を集計・分析することで複式学級における国語学習で「読解力」を高めるための効果的な学習指導方法を探究したいと考え、8つの質問と記述式の質問を行った。質問項目は、①複式学級担任経験年数②学年の組み合わせ③教科の指導形態④個人の意見を全体に広めるために使っている教具⑤複式学級における学習指導の課題⑥間接指導時に取り入れている学習方法⑦ノートに書かせている内容及び書き方のルールと工夫⑧ノート指導の課題点などである。

##### イ 調査結果

県内公立小学校の複式学級併設校 97 校中 82 校から回答提出があり、回収率は 84.5%、



グラフ 1 学年別に指導するうえでの課題

また対象教員 173 人中 144 人から回答提出があり、回収率は 83.2%であった。その結果から複式学級の現状と担任が抱えている課題が明らかになった。

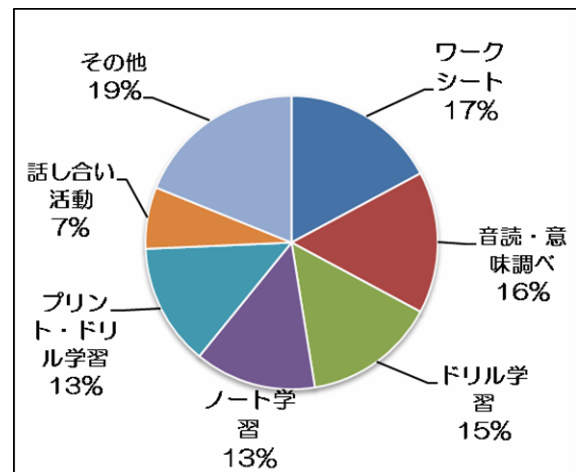
学年別に指導するうえで一番多かった課題は「直接指導の指導時間が不足する(103人)」で、「わたりのタイミングが難しい(80人)」という意見も多かった。また、「課題が理解できず学習に行き詰まり児童の思考が中断することがある。課題が早く終わり学習が停滞する。(112人)」など間接指導時の課題に関する問題が多くあげられたことから、間接指導における課題が重要であることが明らかになった。(グラフ1)

課題に関する問題が多い間接指導時に取り入れている学習方法としては、「課題を自力解決するためのワークシート学習(98人)」が一番多く、次に「音読や意味調べ(90人)」3番目は、「漢字学習定着のためのドリル学習(83人)」だった。その他ノートを使った学習、まとめや発展学習のためのプリント学習、ドリル学習を取り入れている。(グラフ2) 学年や学級の状態、教材によって学習方法を工夫するなど書くことを取り入れている教員が多いということが明らかになった。

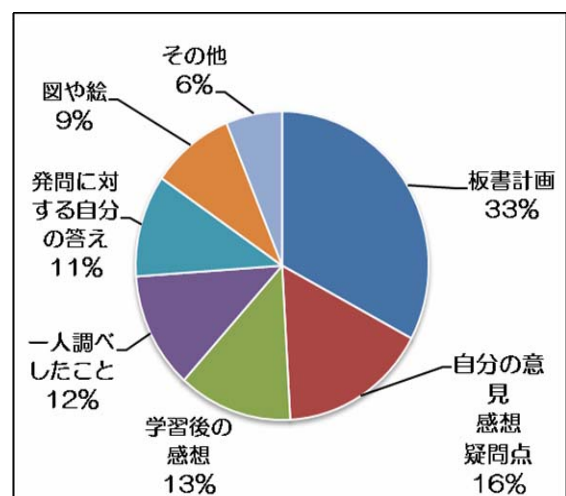
ノート指導においてノートに書かせることは、「板書(221人)」が最も多く、次に「自分の意見や友だちの意見に対する自分の考え(110人)」、続いて「学習後の感想(85人)」だった。その他、一人調べしたことや発問に対する答えや理由など、ノートを使い書かせることを実践されている教員が多いことが明らかになった。(グラフ3)

反面、ノート指導に課題を感じている教員も多かった。中でも圧倒的に多いのは、「書く速さに個人差があり、時間配分が難しい(109人)」ということだった。書く時間に差が出ることによって、授業の中で書くことを取り入れることは、難しいと考えられる。また、「限られた授業の中でノートに書かせる時間

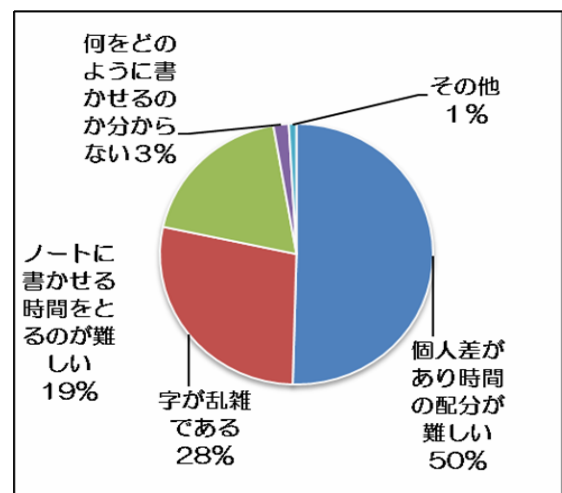
を取るの難しい(40人)」という意見もあった。(グラフ4) 複式学級における学習指導においては特に時間的な余裕がなく、授業を組み立てるうえでノート指導は重要なポイントになると考えられる。以上のような結果から、担任の抱えている課題は多いことが分かった。しかし、実際の授業で「書くこと」を取り入れることで複式学級における学習指導の良さを生かした指導が



グラフ2 間接指導時に取り入れている学習方法



グラフ3 ノートに書かせること



グラフ4 ノート指導上の課題

行われている。間接指導時に「書くこと」を取り入れている教員の工夫として、次のようなことが挙げられる。

- ・ ノートを分割したり書く場所を決めたりして自分の意見や良いと思う友だちの意見も書く。
  - ・ 自分の考えに友だちの考えを付け足す。その際自分の考えが友だちと異なっても消しゴムでは消さず加筆したり別に書いたりする。
  - ・ 自分の意見を発表ボードやラミネート板に書いた後、黒板に掲示し、比べたり似た考え方で分けたりしながら話し合う。
  - ・ 学習リーダーを中心とした話し合いの時に書いたものを使う。
  - ・ 書いたものは次時の授業で使ったり振り返りに使ったりする。
  - ・ できるだけ授業内にノートを確認、評価を入れ意欲をもたす。
  - ・ 書いたものがあると直接指導に入った時、グループ学習や一人学びの進み具合が把握できる。
- また、授業がスムーズに進んだ実践としては次のようなことが挙げられた。
- ・ 間接指導時に一人で学習させ直接指導時に子ども達の思いや考えを発表させた授業。
  - ・ 明確な課題提示ができ目当てがしっかりと示せたとき、児童が理解できた授業。
  - ・ 子ども同士で直接黒板にまとめ分かったことを書き込ませ、直接指導時に説明させる。その中で教師がポイントを絞って発問し、まとめていった授業。
  - ・ 間接指導で用いた課題が直接指導で生かせ、自らが課題を見つけ意欲的に取り組めた授業。
  - ・ 各学年の学習の流れをホワイトボードに書き児童に提示した授業。

自ら進んで課題を解決する力が求められている間接指導時に、書くことや一人学び、話し合い活動を取り入れる。また、明確な課題提示をして目的意識や見通しが持てる授業を組み立てるなど、複式学級における学習指導の良さを生かした指導を行うと、児童の意欲が向上し「読解力」を高めるための力も備わるのではないかと考えた。

### (3) 「読解力」を高めるために「書くこと」を生かす授業

アンケート調査から、ノート指導上の課題として挙げられた何をどのように書かせるか分からない、書く速さに個人差がある、書かせる時間を取るのが難しいなど、「書くこと」についての課題が多いことが分かった。しかし、間接指導時に行った学習をスムーズに直接指導の学習につなげるために「書くこと」を学習に取り入れることは一つの方法である。「読解力」を高めるために、考えたことや読み取ったことを論理的に書くことで自分の考えを明確にすることは重要であり、自主的な学びの力が求められる複式学級での学習指導では必要不可欠である。複式学級における学習指導においても、書かせ方によってはより高い学習効果が期待されるのではないだろうかと考えた。また、書かせることで間接指導時の児童の思考の過程が教師にも確認でき、児童が自己評価、相互評価する手段としても活用できるというメリットもある。具体的な1時間の授業の流れとして次のア～エのような流れが考えられる。

#### ア 学習課題をつかむ（直接指導）

明確な課題を提示する。読み取るために何をどのように書かせるかを明確にし、書き方をパターン化する、箇条書きにする、写真を用いるなどの手立てや方法を具体的に指示する。

#### イ 課題についての考えをもつ（間接指導）

自分の考えや根拠をノートに書く。書く時間は十分保障し全員の児童が書けるようにする。

#### ウ 課題について話し合う（間接指導・直接指導）

ノートに書いた内容をペアで対話したりグループで伝え合ったりする。友達の意見を聞いて自分の読み取りと比べて考えたこと、考えが変わったこと、思ったことを短くノートに書かせる。ラミネート板やホワイトボードに意見を書き、同じ内容の意見などでグループ分けを行い整理しながら全体で話し合う。

#### エ 学習のまとめをする（間接指導）

自分のノートを読み返したり板書を見たりして授業で学んで分かったこと、自分の考えが変わったこと、友だちの考えの良かったことなど授業のまとめとして書く。

#### 4 検証授業

##### (1) 授業の視点(検証方法)

まず、1時間の学習の中で児童の思考が途切れない授業を組み立て、間接指導の学習から直接指導の学習にスムーズにつなげることができるかを検証する。課題解決をするために児童が思考する過程で、大切な言葉や文に線を引いたり、印をつけたりしながらノートやワークシートに大切な言葉や文を書く。書くことを間接指導の学習に取り入れ自分の考えをまとめる時間とし、直接指導の場で全体に広げ考えを確認し再考する学習につなげていける授業展開となるようにする。そのために、間接指導時に児童が何をどうするのか、どこまでやれば良いのかが分かるように明確な発問や指示を出す。

次に、読み取ったことやそれに対する自分の考えを書く場を設定することで自分の考えを「書くこと」に意欲をもち、思考を深めることや学習に対する自己評価の手段となるかを検証する。授業の中で、ワークシートやノートに自分が読み取ったことや自分の考えを書く場を設定し書く時間を保障することで、児童に書こうという意欲をもたせる。また、書いたことをもとに対話や話し合いをすることで自分の意見に自信を持たせ、友だちの考えと比べその違いをノートにメモを取ることでその内容から自己評価の手段へとつなげる。

最後に、書いたことをもとに相互の考えを交流し合って読みを深める場を設定し、交流し合うことで自分の考えを明確にし、他の人の考えを聞くことで思考を深めることができるかを検証する。自分の考えを他の人に伝えるために、まずはペア対話で相手に自分の考えを伝えたり相手の考えを聞いたりする活動をする。その際なぜそう思ったのかどうしてそう考えたのかなど理由もできるだけ伝えることができるようにする。次に全体で意見を出し合い、考えをグループ分けしながら思考を深める。少人数から全体へ、交流の場を広げることで読みを深めていく。学習感想・振り返りカード・感想発表を書くことで学習したことを振り返り、自分の考えが他の考えによって変わったことや気がついたことなどを書く。また、本時の学習で習得した方法を次の学習につなげられるようにする。

##### (2) 授業の実際

###### ア 授業の計画

11月7日～11月15日まで (全6時間)	
大豊小学校3・4年生 3年(2名) 4年(6名)	
単元名	教材名
3年「段落ごとの内容をとらえながら読もう」	「道具を使う動物たち」
4年「事柄のまとめりとりに要点をとらえながら読もう」	「ウミガメのはまを守る」

###### イ 検証授業の考察

###### (ア) 児童自らが課題解決の意欲がもて学習の目的がはっきり分かる課題の設定

3年生には、意味段落を考える際4つの動物がどの段落で説明されているか考えさせるために、ノートに「〇〇は〇段落」と具体的に書くことを指示した。児童は写真を手がかりに段落ごとに内容を捉えながら読み、写真を使ったことで視覚的に文章構成を捉えることもできた。

4年生には、キーワードを見つけさせ、そのキーワードから題を考えさせたり、意味段落の小見出しに使ったりさせた。キーワードが説明文を読む際の手立てとなり、意見のばらつきが少なく話題を焦点化して話し合うことができた。このように、課題がはっきり分かったときは読み取ったことがノートにしっかり書け、それをもとに話し合いに広げていくことができていた。しかし、何をどのように書かせるかが明確でないときや、課題と学習段階にずれが生じた

ときは、児童の活動に停滞が見られ書くことに上手くつながらないことがあり、また、具体的な手立てが少なかったときも学習がスムーズに流れなかった。

両学年とも、間接指導時の課題・指示については何をどのようにするかを明確に出す。また、どこまで到達すればよいのかが分かるように、学習の流れを授業の初めに黒板に提示することで、授業の流れや目的がはっきり分かり学習の流れがスムーズになった。

- (イ) 書くことによって自分の意見をまとめたり見直したりすることで考えを明確にでき、児童にとって書くことが役に立ったと思える活動の工夫

3年生には読み取ったことをノートに書かせる際、「～は」「どんな時に」「～を」「どう使っているか」という書き方を提示した。また、全ての時間にこの書き方を継続して使ったことで児童は迷わず書けた。段落ごとに小見出しをつける学習では、小見出しの並びを一目で見ることができ文章構成を考えるうえで有効であり、学習の流れや何をするのか(目的)が捉えやすくスムーズな活動ができた。また、ワークシートを工夫し適所に使うことは、学習時間の短縮になるだけでなく、書くときに迷うことなく読み取りや思考することに時間を有効に使え、書く意欲につながった。

両学年とも授業展開の中で考えや読み取ったことを書く際、同時間接指導の設定をしたことは同じ学習活動をさせる授業の流れの時には大変有効だった。教師が児童の活動をしっかりと確認できるだけでなく、つまずきにもその場で助言をすることができ、児童も学習に集中し書く意欲も高まった。

- (ウ) 書いたことをもとにお互いの考えを交流し合い、読みを深める場の設定

3年生は、ノートに書いた意見を二人で見せ合い話し合う活動はスムーズにできていたので、ラミネート板や黒板を使うなど視覚的に捉えさせる活動を取り入れれば思考が広まり、教師の評価の際にも役立ったのではないかと考えられる。

4年生は、ノートやラミネート板には短く箇条書きにすることを指示することで時間の短縮ができ意見交流や話し合いの時間が増えただけでなく、この文章の何が大切なのかを考えて書くことができた。また、友だちの考えがすぐに分かり話し合いもスムーズにでき、それを通して自分の考えと比べ考えが変わった児童もいた。しかし、その変化をノートに書き加えるまでは至らなかった。

## 5 成果と課題

- (1) 適切な課題や活動の指示、手立ての重要性

検証授業において特に4年生の授業の中で、課題が児童の思考と結びつかなかったり、指示や手立てがあいまいだったため児童の学習活動や思考に明らかな停滞が見られ授業の流れに影響が大きかった。このことから適切な課題や具体的な活動の指示・手立ては児童の思考や活動に大きく関係すること、複式学級における学習指導において特に重要なことが明らかになった。

書く方法を具体的に指示し、パターン化して続けることは、読み取りが苦手で手立てが必要な児童への対策となり間接指導時の行き詰まり、停滞を防ぐことができると考えられる。

右のように時間を追うごとに書き方のパターンを複雑にしていった。そうすると書き方に慣れてくるのでつまずくことなく書くことができた。読み取ったことを書き方のパターンにあわせることで迷わず正確に書くことができ、時間も短縮できた。(図1)

### 3年生の実践から

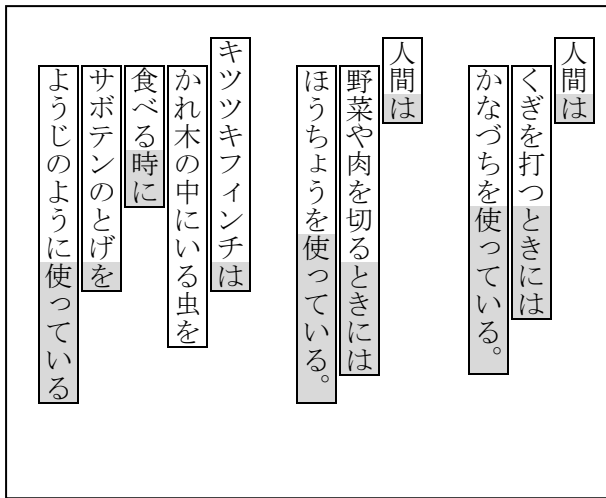
〈1時間目〉○○は○段落

〈2時間目〉は するときに を使う

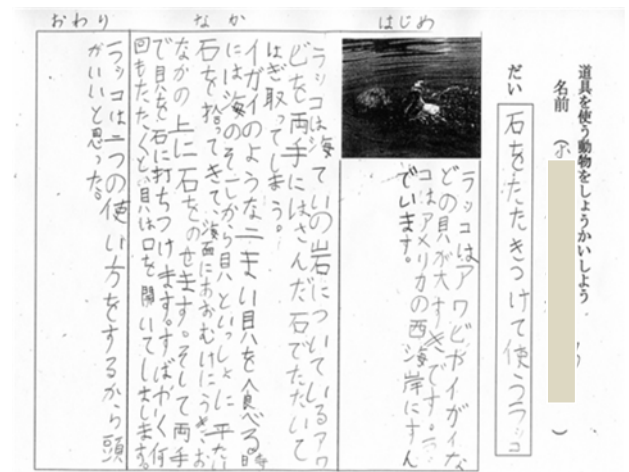
〈3時間目・4時間目〉

は どんな時に をどう使っている

また、最後の時間に書いた紹介文の中にはこの書き方のパターンを使つて的確にまとめることができていた。(写真1)



(図1) 3年生の書き方



(写真1) 道具を使う動物の紹介文

3年生の授業では写真を使って段落分けをし写真を手がかりにして、文章全体の構成をつかむ授業展開をすることで説明文の文章構成を視覚的に捉えることに有効であった。また3・4年生とも、学習のまとめとして説明文の読みの力を書くことに生かして紹介文を書かせた際、写真を使ったことは言語化の手立てとなり児童が思考しやすいことが明らかとなった。

(2) 「書くこと」に対する児童の意識向上

振り返りシート、授業態度、アンケートなどから、「ノートに自分の考えを書いてそれがきちんとできたので役に立った。」、「何をどうするということがノートに書けたので楽しかった。」、「ワークシートに紹介文を書くとき、たくさん書けてかなりうれしかった。」、「いろいろ意見が書いておもしろかった。」、「紹介文を書くとき何を書くか分からなかったけど、勉強して説明が分かりやすく書けた。」、「箇条書きをするのが上手になった。」、「自分の意見が黒板やラミネート板に書けたのが良かった。」、「板書の言葉に自分の考えた言葉をつけ足して書いた。」など書くことが次の学習活動につながり学習の中で役立つことを実感すれば、児童が書くことの価値を認め書くことに積極的に取り組むことが分かった。また、書いたものを友だちと見合うことで友だちの考えが分かることに喜びをもつなど、「書くこと」の良さを実感することができ「書くこと」への意識が向上する。

(3) 思考を深めるための手立ての重要性

自分の考えをノートやワークシートに書き、書いたことをもとにペア対話をし、意見を伝え合ったり話し合ったりする中で相手との考えの違いに気づき、なぜだろうどうしてだろうと思考する。その考えをラミネート板や発表ボードなどを使って全体に広げ話し合うためには「書くこと」を取り入れた活動が重要である。

授業の初めの段階で自分の考えをノートに書きペア対話をする。その後ラミネート板を使って全体に考えを広め、話し合うという学習活動を4年生で取り入れた。感想にも「ラミネート板はマスが大きくて書きやすかったし、後に残るからいいと思った。」、「ラミネート板を使ったことで友だちの意見が分かりやすかった。」、「み



(写真2) ラミネート板を使って

んなが何を分かっているかが知れて良かった。」など肯定的な意見が多かった。ラミネート板に書いたことで視覚的にも見やすく自己評価や相互評価が児童にとって容易に行いやすくなったのではないかと考えられる。また、教師側から見ても、わたった時にすぐに児童の考えや学習の進行状況が把握でき指導がスムーズになるという利点がある。今回はラミネート板を初めて使った。マス目をつけたラミネート板にしたこと、1つのラミネート板に体言止めで短く書くように指示することで文字も小さくならず見やすく書くことができた。(写真2)

間接指導時においてその場での評価は難しいが、他の学年の指導を終えてもう一方の学年にわたった時に書いた物を見て評価できることはとても有効である。評価の時間も短縮でき学習活動がスムーズに流れる。自己評価や相互評価の際にも授業での話し合いや授業後の振り返りができやすく、お互いの意見を交流し合うことで自分の考えを明確にし思考を深めることで「読解力」が高まる。

#### (4) 課題

今回の研究で課題も明らかになった。1点目は国語科における「読解力」で求められている力の中で、「他に転移する力」や「表現する力」を十分に付けられなかったことである。紹介文は的確に書くことができていたが、今回の授業で学んだことを生かして別の場で紹介文を書くなど、定着を図る学習や発展的な学習まではできなかった。しかし、今後様々な場面で紹介文が書けるように力を付けていくためには、発展的な学習を計画的に取り入れていくことも重要である。2点目は1時間の授業で何をどのように書かせるのかを明確にすることができず学習がスムーズに進まなかったことである。課題を明確にし発問・指示をより具体的に出すために教材研究を深めなければならない。

## 6 おわりに

1年間を通して「読解力」を高めるための学習指導法を探るため研究を進めてきたが、限られた検証授業の時間で明らかになったことはほんの一部である。しかし、「書くこと」を取り入れることで確実に「読解力」が向上することを確信することができた。担任の先生から、子ども達は3学期に行った説明文教材の授業に意欲的で、キーワードを使った小見出しづくりや文章構成図の学習に喜んで取り組んだこと、検証授業で学習したことが土台となっていて授業が大変やりやすかったという報告を受けた。今回の研究を出発点に子ども達が思考し意欲的に書き「読解力」を高めていけるよう、今後も実践を重ねていきたい。また、今回明らかにできなかったことや他の学習指導方法も実践を通して学んでいきたい。

#### 引用・参考文献及び資料

- 1) 文部科学省(2005) 「読解力向上に関する指導資料」
- 2) 国立教育政策研究所(2003) (2005) 平成13・15年度小・中学校教育課程実施状況調査結果概要
- 3) 全国国語授業研究会(2005)18・19頁 『読解力を高める』授業者からの提案 東洋館出版社
- 4) 石田佐久馬責任編集(1992) 「書くことを生かした説明文の授業」 東洋館出版社
- 5) 全国国語授業研究会・筑波大学附属小学校国語研究部(2006～2007)「子どもと創る『国語の授業』」  
NO.16～NO.19 東洋館出版社